

22

東洋紡績株式会社附属看護婦学校に関する一考察

佐藤ゆかり

三重の女性史研究会

工場看護婦や工場看護婦養成の研究は一部に行われているが、看護史および看護教育史の中ではまだ僅かである。一方工場看護婦を養成し雇用した会社の社史編纂においても、工場看護婦の扱いは非常に少ない。その中で、東洋紡績株式会社(現東洋紡株式会社)の社史『東洋紡績株式会社要覧一創立二十年記念一』(三橋楠平 1934 / 以下『二十年史』)『東洋紡績七十年史』(同編修委員会 1953)は、同社附属看護婦学校の記述のある稀有な著作である。しかし工場看護婦・看護婦学校に関し当時収集した史料や聞き取り内容等は既に散逸しているという。そこで今回は『三重県統計書』(三重県 1929~40年)や新聞記事等も含め、同社附属看護婦学校の変遷とその社会的使命を考察したい。

東洋紡績は1914(大正3)年6月三重紡績と大阪紡績が合併し誕生した。同社に看護婦が配置された時期は不明だが、08(明治41)年7月4日伊勢新聞「投書函」に三重紡績津分工場から桑名分工場に異動した看護婦頭の記述があり、合併以前より配置があったと思われる。35(昭和10)年には三重県内の富田・津・四日市・四日市(分院)・山田の各工場病院にそれぞれ6・4・2・2・7人看護婦の配置が見られたという(『三重県看護史』同編纂委員会 1987 / P137)。

同社附属看護婦学校は22年9月大阪市の四貫島工場内に設立された。14~20歳・独身・高等小学校卒業か高等女学校2年以上修業を入学要件とし、修業期間は2か年だった。当初は卒業後1年間同社工場病院勤務の義務があり(『二十年史』P81)、工場看護婦を自前で養成する目的があったと思われる。だが29年4月同校は三重県宇治山田市(現伊勢市)の山田工場に移転する。山田工場が新設間もなかったこと、看護婦学校と同じく22年四貫島に設立された男子技術者育成のための職工教育所が、26年一足先に山田に移転していたことが理由と考えられる。しかし最大の理由は、27年10~11月四貫島工場で発生した労働争議から女子生徒を遠ざけることだったのではと考える。

『三重県統計書』によれば、入学者数は当初25名で、35年度から30名、38年度から35名、40年度は45名と増加している。これは同社附属だけでなく、例えば同地域の同じ各種学校の枠組で、生徒数も同規模の宇治山田市医師会附属私立三重看護婦学校でも同様の傾向にある。しかし同社附属が医師会附属と異なるのはドロップアウトの低さである。算出した当該生徒数は医師会附属で2桁の年が複数あるが、同社附属は0~3人と少ない。また入学志願者も宇治山田市役所『市勢要覧』(1934・38年)によれば、医師会附属が各年46人・69人に対し、同社附属は各年176人・209人と大きな差がある。これは地域的な医師会附属と全国的に募集を掛ける紡績会社附属との違いはもちろん、個人病院等で働きながら学ぶ医師会附属との待遇の格差が大きいと考える。『市勢要覧』によれば同社附属の歳出経常予算は33年度12,800円・37年度16,200円で、医師会附属の約10倍である。『二十年史』によれば、学用品は全て会社支給、月額6~10円の手当があり、寄宿舎費・食費徴収もなかったという。女子の高学歴が望まれなかった時代、経済的な心配をせず修学や資格取得ができる場として重宝されたのではないか。学校生活・教科内容の記録は確認できなかったが、寄宿生活については前述の職工教育所の記録が残っており(『東洋紡績株式会社職工教育所現況』協調会教務課 1932)、例えば寄宿舎の掃除等はそれに準ずる規則があったのではと考えられる。

戦後は制度改正に伴い、48年同社附属乙種看護婦養成所、53年同社附属准看護婦養成所となった。社史では触れられていない終焉は81年3月の卒業式、卒業生は10名と新聞記事は伝えている(伊勢新聞・朝日新聞 1981年3月14日)。繊維産業の衰退、女子の高校進学率の増加が背景にあると考えられる。そして最後の卒業生10名も全て全国の工場に赴任したと記事は結んでいた。